

Sっ気のある娘を
逆に手籠めにするCG集

ろいびっちに
お仕置き!

逆転注意



自然豊かなその森の小屋には、
「遊んでくれる」ロリビッチがいるという。

「勝負」の結果如何でご褒美あり、
というわけだ。

ただ…色々「遊んで」くれはするものの、
「本番」をしてもらったという話は聞かない。

俺も、してもらったことはない。

「ふうん…またやらねにきたの?」

「いいわ…アタシが相手」

「…めげな…」

「ありがたく思いなさい、」

「のぶた〜」



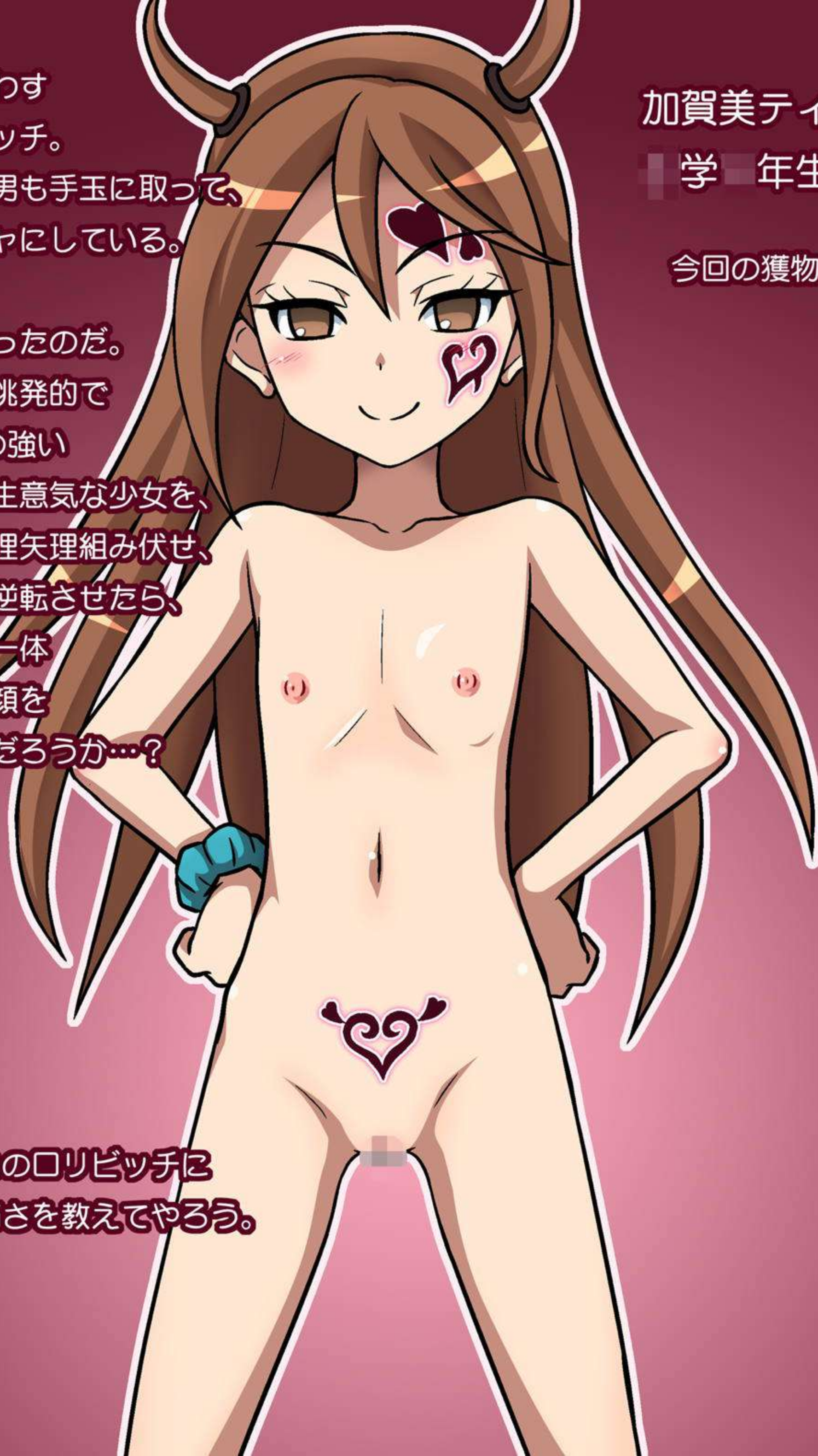
男を惑わす
ロリビッチ。
大人の男も手玉に取って、
オモチャにしている。


加賀美ティナ
学年生

今回の獲物。

ふと思ったのだ。
いつも挑発的で
Sっ気の強い
この小生意気な少女を、
もし無理矢理組み伏せ、
立場を逆転させたら、
彼女は一体
どんな顔を
するのだろうか…？

今日はこのロリビッチに
大人の怖さを教えてやる。





最初は手コキをしてもらった。
小さな手を器用に使い、俺の一物を扱き上げる。
■学生っとは思えないテクニック。
さすがはロリビッチで有名なだけはある。

手コキのテクニック一つ見ても、
相当に「経験」している感じはするのだが。
一物を握りつつ寄り添う少女の甘い香り。
思わずその華奢な体に襲いかかりたくなる気持ちを
今はこらえる。
が…まあ、射精の方はこらえようがなかった。
本当に大したテクだ。

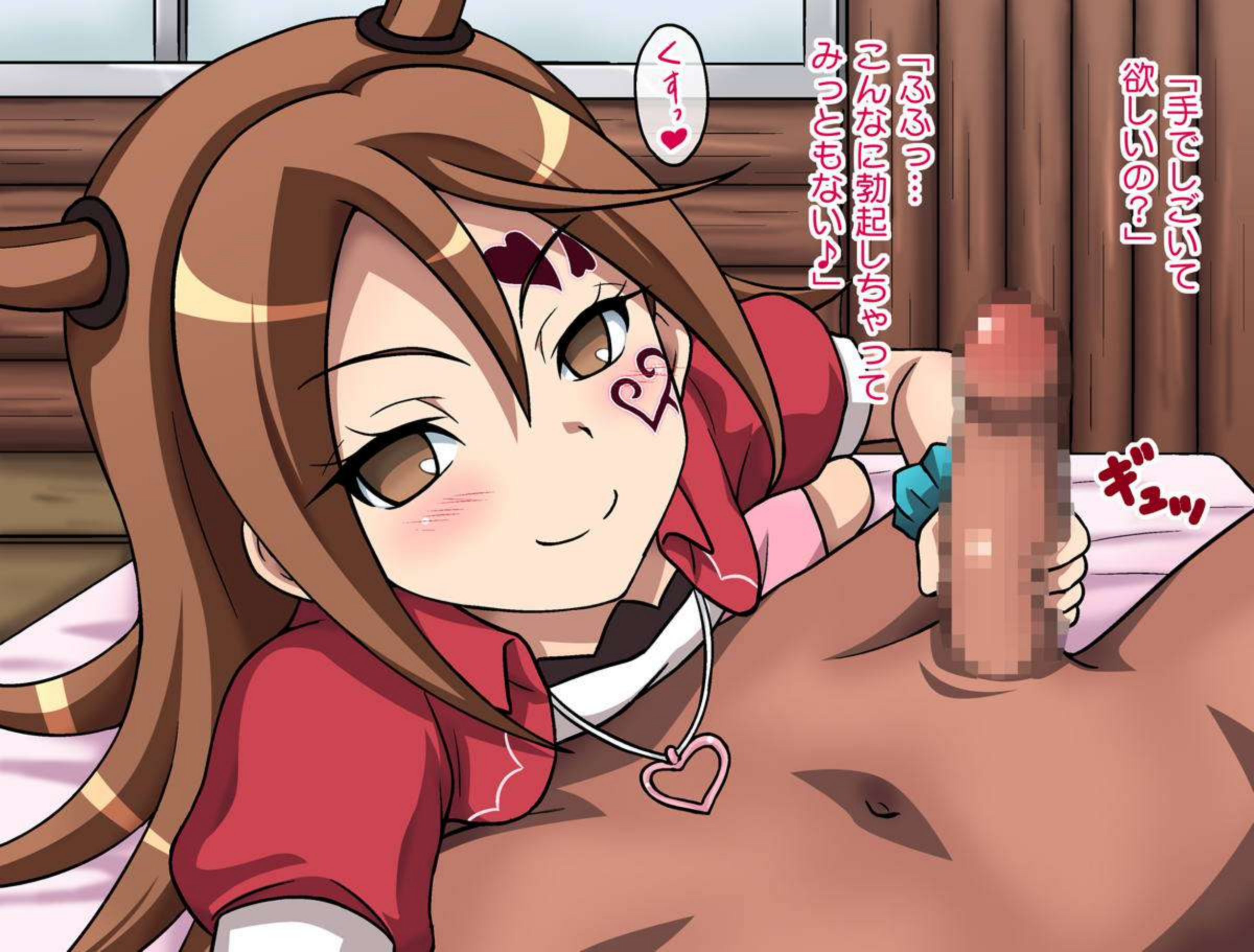
「手でゴージャスな
欲しいの〜」

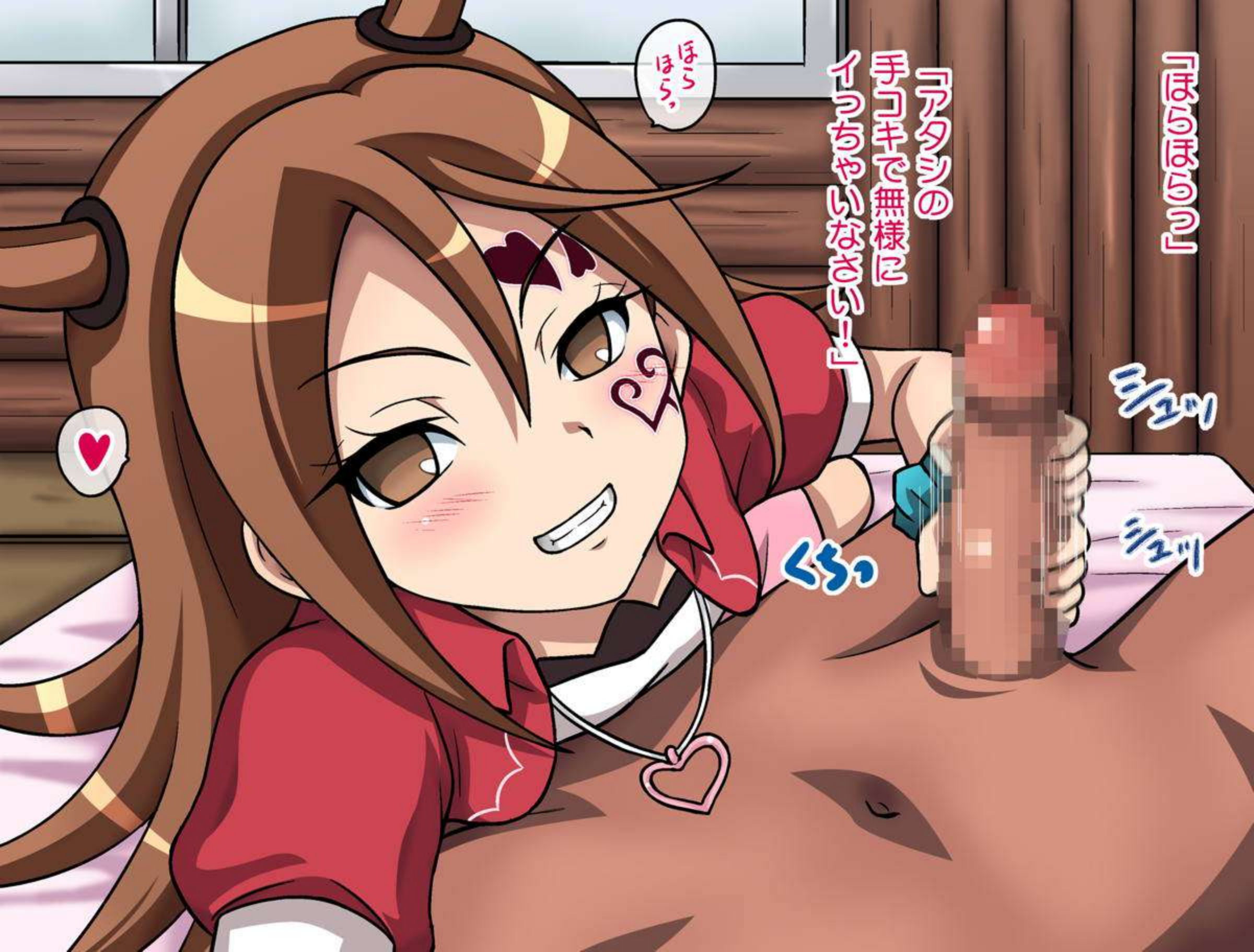
キュッ

「ふふっ…」

「こんなに勃起しちゃって
みっともない〜」

くすっ♡





「ほらほら」

「アタシの手コキで無様に
イッチャいなさい！」

ほら
ほら

ツツツ

クチャ

ツツツ



「この程度でイっちゃうなんて
ほんと情けないわね」

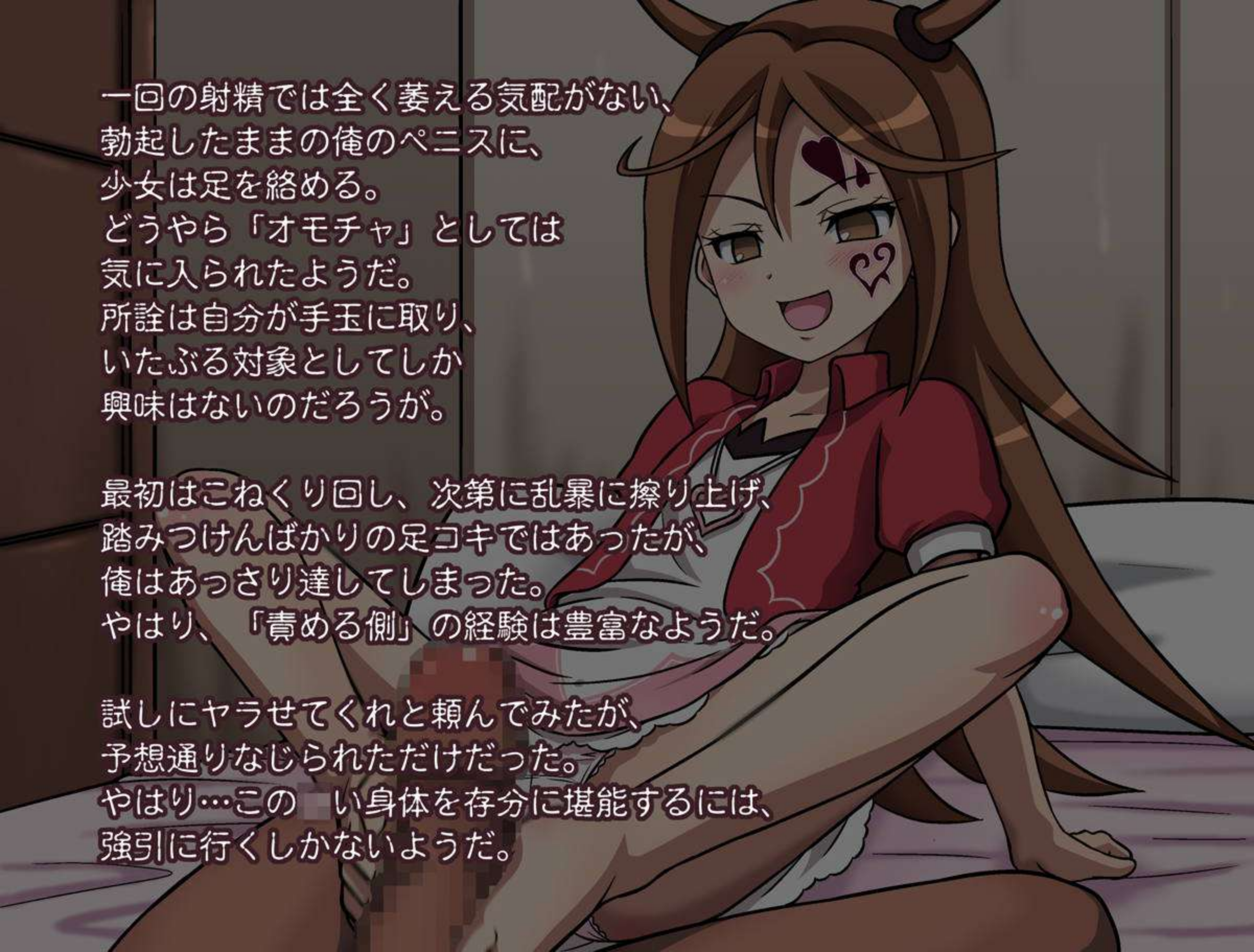
あはっ
♡

ピュルッ! ピュルッ!

ピュッ

ピュッ

「あはっ...
イっちゃうたあ♪」



一回の射精では全く萎える気配がない、
勃起したままの俺のペニスに、
少女は足を絡める。
どうやら「オモチャ」としては
気に入られたようだ。
所詮は自分が手玉に取り、
いたぶる対象としてしか
興味はないのだろうか。

最初はこねくり回し、次第に乱暴に擦り上げ、
踏みつけんばかりの足コキではあったが、
俺はあっさり達してしまった。
やはり、「責める側」の経験は豊富なようだ。

試しにやらせてくれと頼んでみたが、
予想通りなじられたただけだった。
やはり…この い身体を存分に堪能するには、
強引に行くしかないようだ。

「あはっ…なにその情けない顔…」

「さっき射精した
ばっかなのに…」

あはっ…
情けない顔

ほらほら、

「足で乱暴にされて
また出しちゃうの？
どうしようもないブタね」

「……ふうん…そんなに
アタシの足、気持ちいいんだ」

「でもまだ出しちゃう駄目」



「ほらほら…どじまじで

耐えられるかなっ?」

「…あんっ♪」

♡♡♡♡♡

出たぁ♡

「どひっ…」

また出たあ…」

「全く堪え性が
ないわね…」

「そんなんじや

もう相手してあげないわよ?」



「ふん…こんなにあたしの足
汚してくれちゃって…」

ふんっ

何足に
かけてんの

「そのくせまだ萎えないのね
……このケダモノ」

「……は？何？
やらせて欲しい？」

「何勘違いしてんのブタ」

「アంతはアタシのただのおモテチャ。
身の程を知らなさい！」

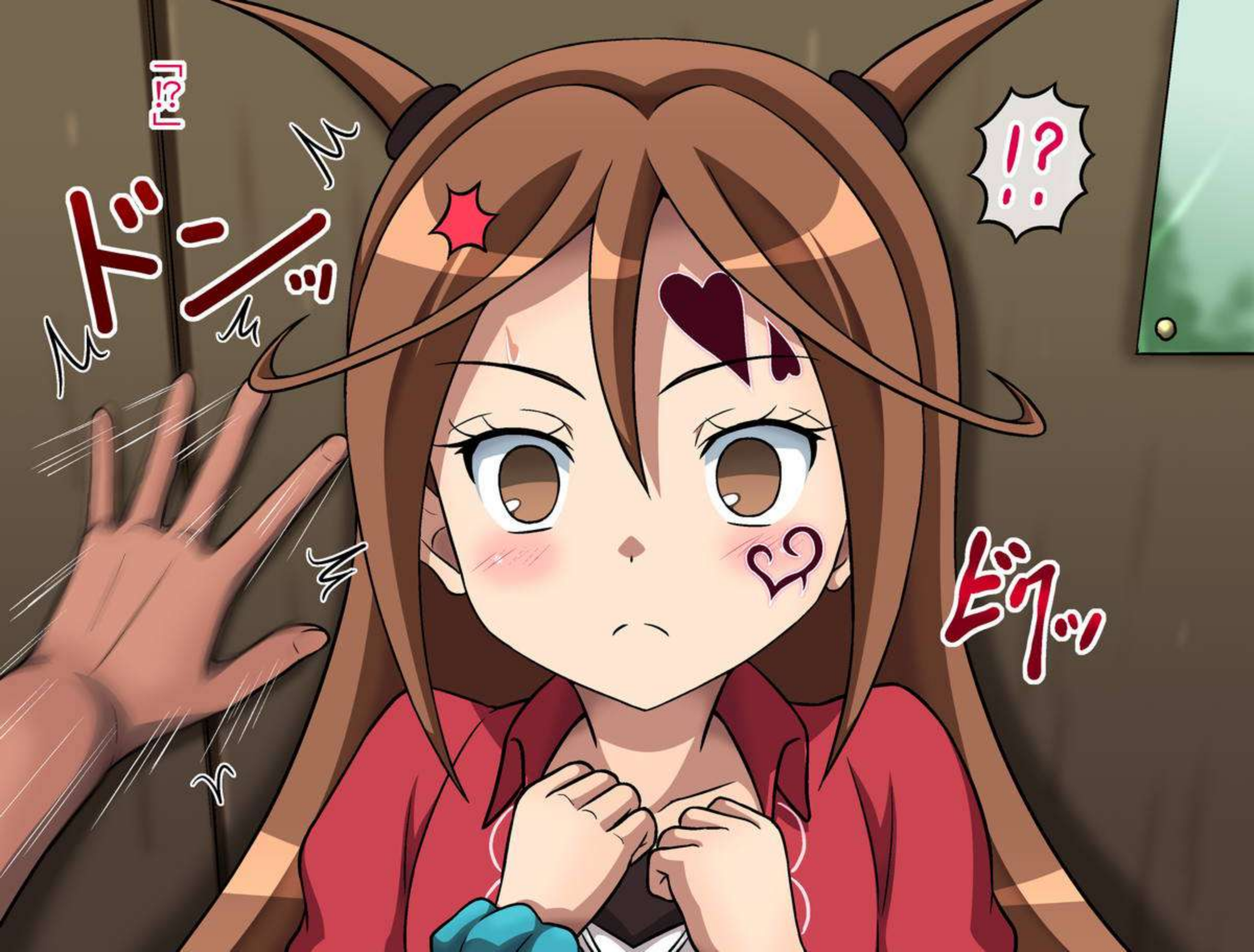
ドロッ

ぐいっ



調子に乗る少女を壁際に追い詰める。

初めはそれでも強気な態度を崩さなかったが、俺が本気だと分かると僅かに怯えの色が見えた。



「フッ」

フッ
ムッ

!?!!

ビッ

「……なんのつもり？」

「アンタ……本当に理解ってないみたいね」

フンミ……

「……フンミ……」

「そんなんでアタシが」

「アタシをいっけ」

「アタシをいっけ」



「ちよっ…アンタマジで…っ」

「やめなさい！本気で怒るわよ!?!」

くっ…

マジで…


「今謝るなら

許してあげるから…」

「やっ…ちよっ…寄るなっ!

来んなこのブタっ…!」

どいっ



少女の足を掴んで床に押し倒し、
パンツをずりおろす。
ぴっちりと閉じた割れ目が
あらわになり、
彼女は明らかに狼狽していた。
これは本当に経験がないのか。

事をスムーズに進めるため、
俺は媚薬を使うことにした。
媚薬の詰まった注射器の針を
その小さな陰核に容赦なく
突き刺す。
■い少女には強力すぎる媚薬だ。
たちまち少女の息が荒くなる。

ちよつ…
ちよつ…

「ああっ…！
パンツ脱がすな変態！」

「な…ちよつ…
やめなさい！
やめてっ！」

「馬鹿っ…見るなっ！
見るなあっ！！」

ぐいん

「放せっばー！」

「……ちよつ…」

「その注射器は何っ…？」

放せっ……!

「放せっ……
放しなさいっ……ばー!」

アタシに
向してっ……

「アタシにこんな事
してタダで済ませ
て……!」

「なめし……
ほんとうに……
やっ……と注射する
つもりなの!」

「おぎんご」

「痛い痛いッ…
やめてええッ!!!」

「おぎんご?!
抜いてっー!」

ピクッ

ピクッ

ひびっ!!

「ああ…入って…
くっ……アタシの…
おおおおおッー!」

ズッ



あ…あ…


「うあつ…ああ…
何これっ…
アタシ…体が…
熱いッ…！」

アタシ…
体か…

「アタシに何を
注射したのっ…？」

「ああ…やだっ…
もあやめなさいっ…！」

「アタシ…濡れてっ…
何か…あそこから
あふれちゃっっ…！」



大きく開脚した状態で少女の身体を拘束する。
その閉じた割れ目を広げ、テープで固定して観察したが、
その秘壺の中心には、純潔の証がきっちり見て取れた。
そんな少女のクレバスを電マでなぞりあげると、
たちまちその膜の奥から愛液が溢れ出す。
初めての電マの刺激で、彼女はその華奢な体をのけぞらせ、
何度も何度も絶頂した。
イカせるのはお手の物でも、イカされるのには慣れてないようだ。

「早く放して...」

「こんな格好...」

んん、

んん、

んん、

くっ...
こんな...

はなして...

「ブタの分際でアタシにこんな事してっ...
ただで済むと思ってるの...!?」

「ひゃあッ!?
やだっ…そこっ…
触るなあっ…!!!」

「ああっ…嘘っ…
アタシなんで
こんなブタの指で
感じてっ…!」

ひゃあッ!!

ビクッ

くちゅっ

ビクッ

やだっ…!
触るなあっ…

「…ッ!
そんなわけないっ…
感じてるよんか
ないわようん!
アタシの指なんかでっ」
「え…なら気持ちよく
してやるって…
今度は何を…ッ!?」

「…」

「らめらめらめえっ…!!
イツてるっ…アタシもあ
イツてるからっ…!!」

「もあっ…
許じっ…!!」

ビーン

ピン

ビーン

ビーン


お…

ビーン

「おおおっ…!!
んほおおっ…!!
おお…ツツ!!」

んほおおお…

「もあっ…もあ無理っ…いくの無理っ…!!」



ついにその純潔を奪う。
あの小生意気な少女が怯えた顔で
何度も何度も懇願する姿はなかなか
見ものだった。
そんな少女を押さえつけ、
媚薬の効果でドロドロになった
狭い秘壺に己の欲望を一気にねじ込む。
しばらくは純潔を失ったショックと、
破瓜の激痛に泣き叫んでいた少女だったが、
オーバードーズ気味の媚薬の効果で、
強制的に絶頂に昇り詰めていき、
結局は俺と同時に絶頂することになった。

「んっ…アంతタ…本気なのっ?」

「本気で…アタシはっ…」

うぐっ…

やめっ…

「やだっ…
アタシっ…
まだシたこと
ないのっ…!」

「今度は口でして
あげるからっ…ねっ…?」

「だからお願いっ
それだけはっ…!」

アタシ

アタシ

アタシ

「やめっ…
放せっ…」

んっ

んっ

ズッ

あがッ!!

!?!?

「痛っ…!?!」

「嫌っ…ほんとに入っでっ…!」

ビクッ

「あがッ!!」

「無理無理無理ッ…
入らないっ…!」

「ひびきあめッ!!」

ズリゅん

ぐらッ

ビクッ

ギョッ...

ビクッ

ひぐッ...

あッ!!

「ひぎっ...あッ...
痛ッ! ひぐっ...!
いひいッ!?!」

ズサッ

ビクッ

ん

ぐちゃ

ズサッ

ぐちゃ

ぐちゃ

ズッ

ズッ

ズッ

「抜いてっ...
抜いてよっ...
こんなの
嫌あっ!」

「ぎッ...イッ...
ああ...嫌なのにつ...
ブタのちんぼなのにつ...」

「アタシっ...イキキキ...」

おッ!?

んおおおッ...

「あッ!」
熱ッ!!

「...」

ビッ

ビッ

ビッ

ビッ

ドッ

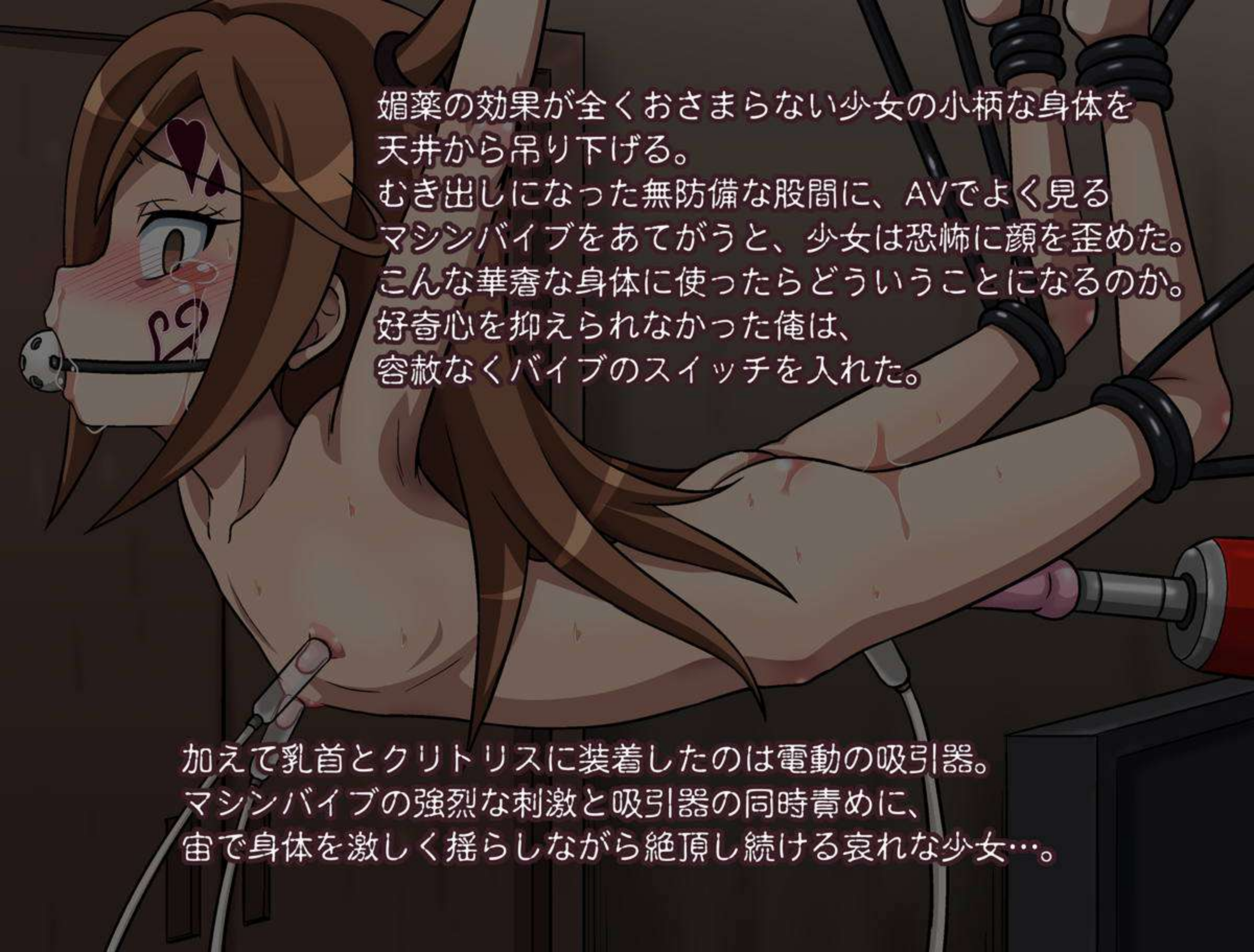
ドッ

ゴッ

「んおおお・おッ...!!」

「なかにっ...吐てるっ...嘘っ...

「...アタシっ...イッてるっ...イッてるっ...イッてるっ...」



媚薬の効果が全くおさまらない少女の小柄な身体を天井から吊り下げる。
むき出しになった無防備な股間に、AVでよく見るマシンバイブをあてがうと、少女は恐怖に顔を歪めた。こんな華奢な身体に使ったらどういうことになるのか。好奇心を抑えられなかった俺は、容赦なくバイブのスイッチを入れた。

加えて乳首とクリトリスに装着したのは電動の吸引器。マシンバイブの強烈な刺激と吸引器の同時責めに、宙で身体を激しく揺らしながら絶頂し続ける哀れな少女…。



んげっ...

「んげっ...」

「んげっ...」

「んげっ...」

びびっ

げっ...

びび



んぐっ...

んぐっ

んぐっ

びびっ

んぐっ

何が入って...
怖いっ.....!

なっ.....
今度は何...!?



おぶッ!!?

んぽおおおッ!!

おおおおおッ!!

おぶッ!!?

どろっ

どろっ

んぽ



おぶッ!!

ズリュン

（ああッ!?
なにか入って
…ッ!）

キエッ

ビョッ

バッ

（しかもクリトリス
吸われちゃってさっ
…クリ…大き〜
なっちやうシ…!）

ズチャッ



ビッパッ

おぼッ!?

ゾオオオオッ!!

「んほおおッ!」

「おぼッ!」

「ソオオオオオッ!!」

「おぼッ!」

ビッパッ

ドクドク

おぼッ!?

ドクドク

ドクドク

ビッパッ

グシャッ

ビーン

おっ！おっ！

ゾオオオオッ！！

ドクン

ドクン

ビーン

ドクン

ドクン

何これ!? 何これ!?
何これ凄いッ…!!
奥っ…突かれてっ…!!

ビーン

ドクン

ビーン

ドクン

ドクン

ドクン

ビーン

（こんなの耐えらんない！
壊れるっ…アタシっ…
気持ちよすぎで
壊れちゃうッ…!!）



（あああつ…イッてる…
いつたまま…戻って
これないっ…）

（ウリもっ…
苦しいっ…）

ドク

ドク

ドク

ドク

キエ

キエ

ドク

キエ

ドク

ビクッ

アアア
アアア
アアア

（もあいきっ
ぱなしでっ…）

ビクッ

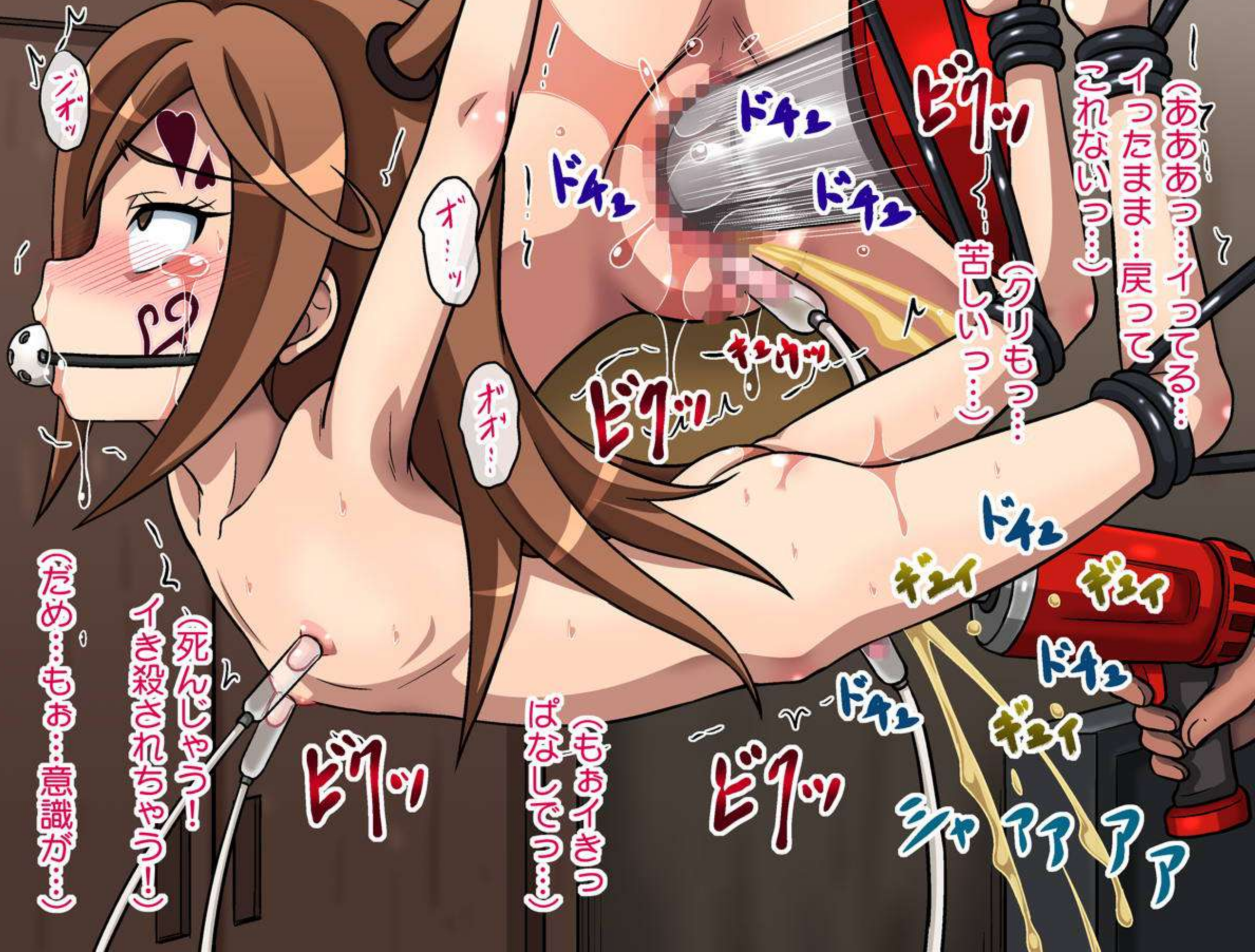
オ…ッ

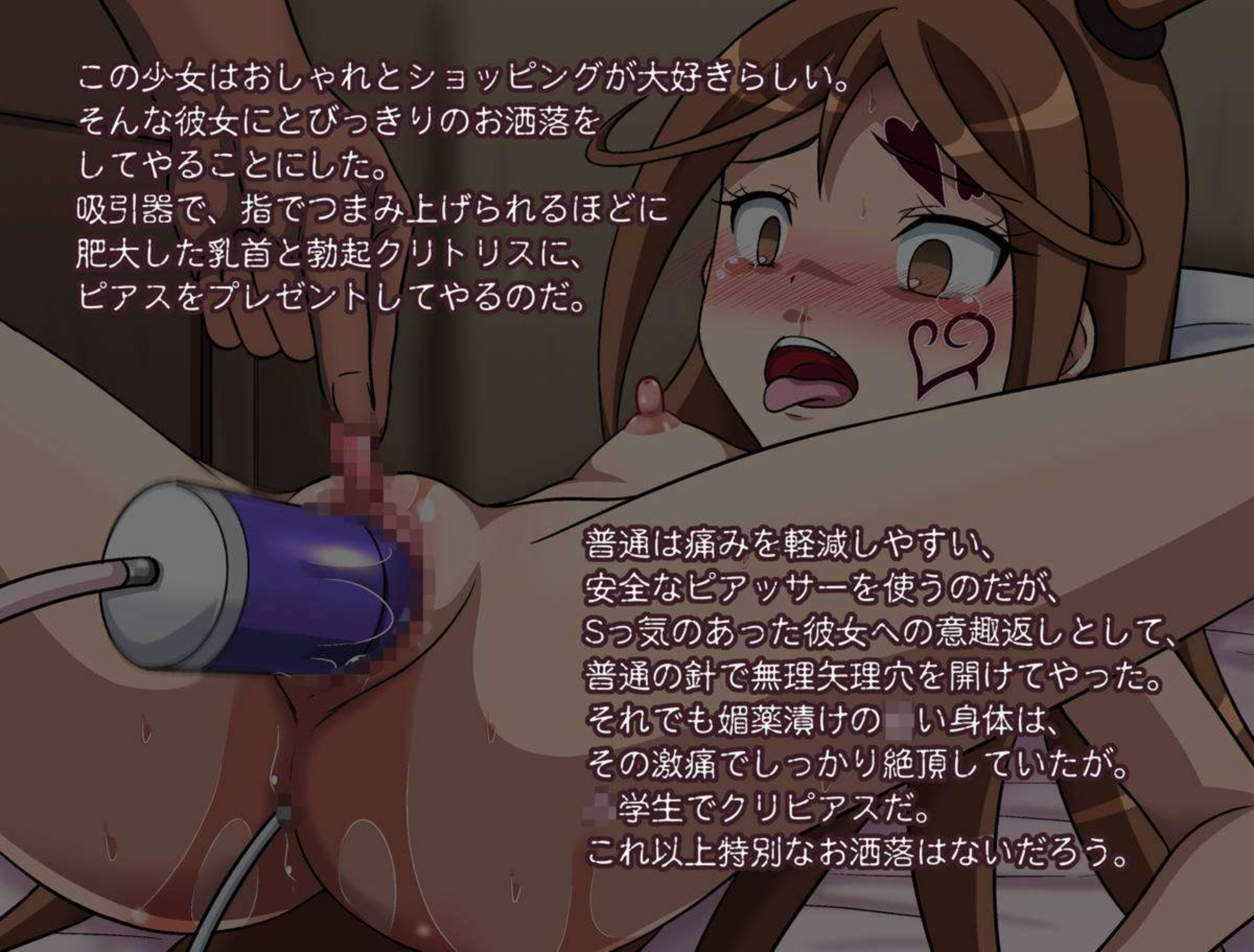
オオ…

（だめ…もあ…意識が…）

（死んじやう！
いき殺されちやう！）

ゾッ





この少女はおしゃれとショッピングが大好きらしい。
そんな彼女にとびっきりのお洒落を
してやることにした。
吸引器で、指でつまみ上げられるほどに
肥大した乳首と勃起クリトリスに、
ピアスをプレゼントしてやるのだ。

普通は痛みを軽減しやすい、
安全なピアッサーを使うのだが、
Sっ気のある彼女への意趣返しとして、
普通の針で無理矢理穴を開けてやった。
それでも媚薬漬けのいい身体は、
その激痛でしっかり絶頂していたが。
学生でクリピアスだ。
これ以上特別なお洒落はないだろう。



「イギイイイイツツ」

「アキキキ」

「トギツツ」

「ビクッ」

「ゴニッ」

「そんな…冗談…」
「や…そんなの
死んじゃうからっ…」

「…めめ」

「ビクッ」



「...おほおっ...」

「んおっ...」

「おっ...」

「あぎっ...ん...」

おほっ...

おっ...

んおっ...

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

クワッ

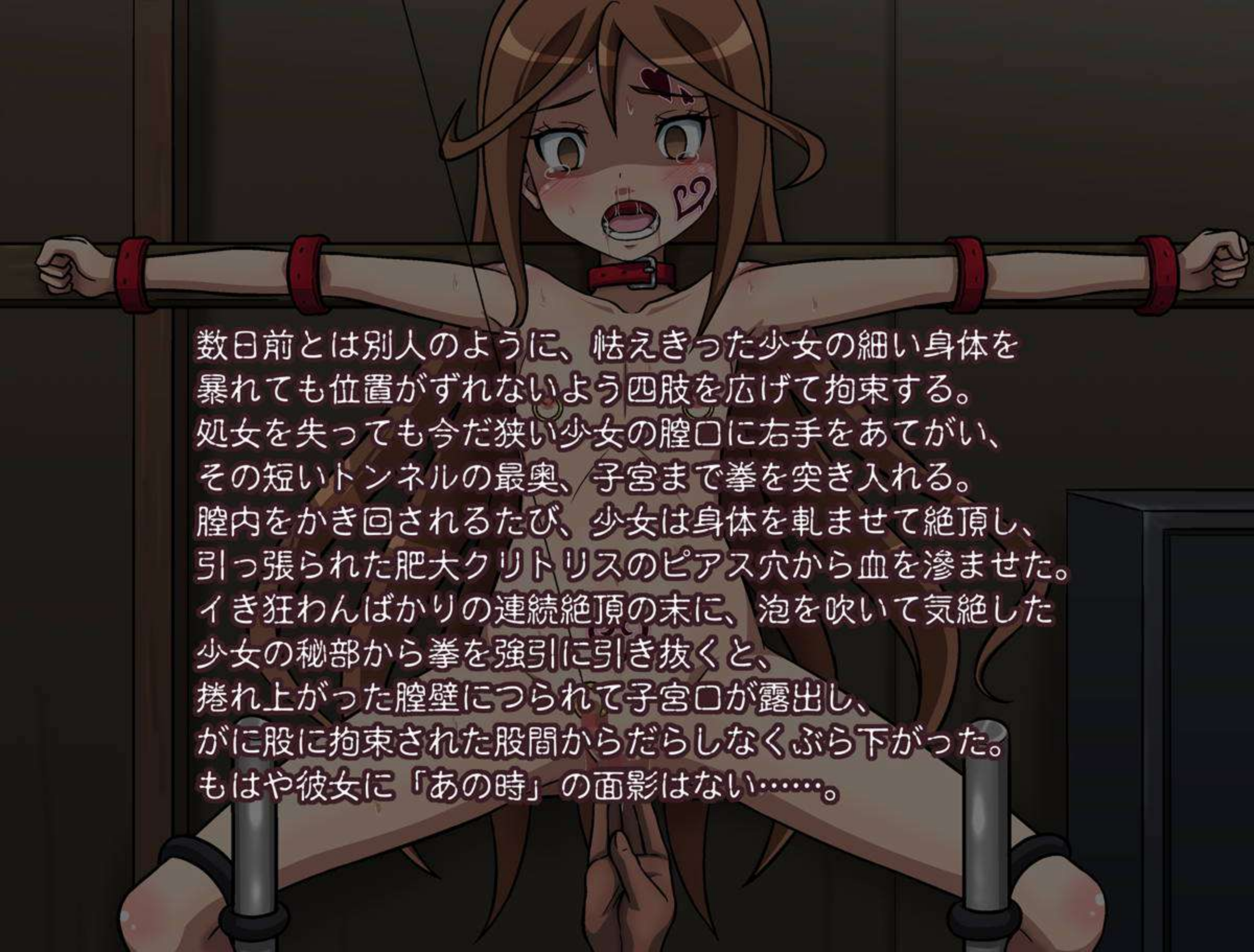
クワッ

クワッ

クワッ

クワッ





数日前とは別人のように、怯えきった少女の細い身体を
暴れても位置がずれないように四肢を広げて拘束する。
処女を失っても今だ狭い少女の膣口に右手をあてがい、
その短いトンネルの最奥、子宮まで拳を突き入れる。
膣内をかき回されるたび、少女は身体を軋ませて絶頂し、
引っ張られた肥大クリトリスのピアス穴から血を滲ませた。
いき狂わんばかりの連続絶頂の末に、泡を吹いて気絶した
少女の秘部から拳を強引に引き抜くと、
捲れ上がった膣壁につられて子宮口が露出し、
がに股に拘束された股間からだらしなくぶら下がった。
もはや彼女に「あの時」の面影はない……。

「ああ…
嫌…ッ」

「そんなっ…!」

「拳なんて…
そんな大きいの
入るわけない…!」

ああ…
嫌!

無理…

そんなの…
入らない…

「やだ…
ほんとに
壊れちゃう
からっ!」

「もう許して…
誰か助けて…
もう生意気言わないからっ!」

「お願い…ちゅ…!」



ビクッ

ビクッ

びく



「イギイイイイイイイイイイ」

「ア…キミ…」

ヒギッ!!

ビクッ

ガチャ

ビクッ

ズリムン

「おおっ...」

「ごわね...た...」

「アタシ...」

壊されちゃった...」

「んおっ...」

お...

ぼ...

お...

「おっ...」

飛び出っ...」

「おっ...」

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

がく

がく

ひく

ひく

がく

がく

がく


お願い...おんごう...」

「もお...」

「ごんなの嘘...」

がく





飽きるほどの繰り返しの陵辱の末、
少女が完全に「墮ちる」ころには、
必然的に妊娠していた。
不自然に膨らんだ腹を抱え、
アナルセックスで絶頂する少女。

そしてその時は来る。
まだ はずの い少女は、
乱暴な肛虐の最中に、
無残に肥大した陰核の下で
パクパクと物欲しげに痙攣する
小さな穴から、気も狂わんばかりの
全身を突き抜ける激しい絶頂とともに
新たな命をひり出したのだった。



ビクッ

ブル

んおあッ...

ビクッ

「んああッ」

「アタジイキまずッ!!!」

「イキまずッ!」

「イッてもいいですかッ!」

「あッ! イキますッ!」

「イギヤアアアアアアアアッ!!!」

ブル

「イビイビイビイッ!」

んおあッ...

「ッ!」

ビクッ

ドゾ
ドゾ
ドゾ

アッ

アッ

「いつぢやうだ……まら……お尻で……」

「お……」

「んあ……」

「おでジミだ!」

ピグッ

お……!!

ぶ……

産まんる……

んおおお……

「あああッ! 出るっ! 赤ちゃん出るっ!!
「:=:=:=赤ちゃん産んでイっくっ! イっぢやうだ!」

がく

「……っ……産まれ……」

「アタシの赤ちゃんっ

……産まれっ……」

がく

ピグッ

お

ピグ

お

ピグ

お

がく

ピグッ

ゴポッ





















